

横濱が、日本ジャズ発祥の地として、約50年間ビートを刻んできたことは異論がないであろう。日本のモダンジャズの原点は、昭和29年、伊勢佐木町二丁目にあった「モカンボ」から発祥したと言っても過言ではない。私が、横濱を舞台にした小説「贖大人(横濱「JAZZ Age」に改題)」を、HPに掲載した時、若い読者から主人公森村慎次郎のモデルを問われたことがある。その時は、特定のモデルは居ないと応えたが、インターネットのジャズサイトの管理人でかつ愛読者の一人、猫仙人を名乗るメル友が適切な提案を呉れた。主人公の活躍した時代の雰囲気、最近の若い読者に解り難いので、横濱のジャズの歴史の代表例として、伝説的なジャズクラブ「モカンボ」を小説巻末でコラム的に紹介してみたらどうかという助言だった。

確かに遡れば、ジョウジ・ガーシュインの曲が、大正十四年には既に伊勢佐木町の芝居小屋で演奏されたと言われ、ポール・ルムダンス(社交ダンス)が盛んになり、鶴見の花月園や海岸通り20番地のグランドホテルでスウィングジャズバンドの演奏もされたようだ。ダンスホールに女性が沢山いた本牧のチャブ屋でも、大正、昭和初期にラグタイムの野卑なピアノが、踊子のために鳴っていたに違いない。客はジャズを聴きに来た訳ではなく、唯チャブ屋の淫靡な雰囲気を楽しみに来たに過ぎない。もつと正確に言うなら、ジャズ風ピアノ曲やレコードが、ダンスに潜っていた時代であり、踊子の嬌声に合せ音楽が伴奏を務めていた時代でもあった。だからとても日本のジャズの誕生とは言えない時代である。これは主人公森村慎次郎が、本牧「Tophon(霧笛)」

を根城にして、ジョージ・寺岡(P)の下でジャズの修行をした時代から遙に昔の話である。昭和20〜27年、米軍が沢山横濱に滞在するようになると、専用クラブでビ・バップが持て囃され盛んに演奏された。この頃になると、日本人演奏家もアルバイト的なキャンプの日雇いミュージシャンとして結構誕生してくるのである。そうした日本人が、横濱港に上陸のレコードや、軍クラブから流れ出た譜面をコピーして、器用にジャズを演奏した。かくして、それまでのデキシーやスウィングジャズ風のダンス音楽全盛時代から移行すること十数年後、

皮肉にも日本の第二次大戦の敗戦により、横濱進駐軍のキャンプから、やっと日本のモダンジャズの黎明期が幕を開けたのである。ダグラスマッカーサー元帥が、一時的にニューヨークランドホテル315号室に滞在し、現在の山下公園に一部の軍隊を野営させ、やがて約9万人の米軍を横濱に駐屯させたからこそ、日本にもダンジャズが根付いたとも言えるのである。何れにしても、未だ外国人演奏家に敵わなかった時代で、日本のモダンジャズは、未だ物真似の域を脱し得ず、外人演奏家から擲擲されていた。「孤高の天才」といわれた夭折のジャズピアノスト、守安祥太郎が仲間と共に、日本人の手になる初のジャム・セツションを、伊勢佐木町のクラブ「モカンボ」で行っている。これが後に、昭和29年7月27日「幻のモカンボ・セツション」の名盤となつて残された。日本ジャズ創世記の貴重な録音と言われている。守安祥太郎(P)宮沢昭(H)鈴木寿夫(B)清水潤(D)渡辺明(A)S)が当時のメンバーである。しかし守安祥太郎の活躍は昭和30年までである。この年東京目黒駅で電車に飛び込み自殺を図り31歳で不帰の客となつたからである。クラブ「モカンボ」のセツションは、

オーナー植木幸太郎が、ジャズメンに勉強の場を提供せんと、週に一度夜中に店を開放したことに端を発している。このオーナーも、横濱銀行の支店長をやりながら、本牧でチャブ屋も経営したという今では考えられない傑物であった。始めは無料だったが、人気ができるに従つて混むようになり、入場料300〜500円をとつたという。司会はクレージーキャッツ旗揚げ前のハナ肇で、植木等も関係している。演奏は、深夜十二時から朝まで続いたという。他の日本人セツションメンバーは、澤田駿吾(G)五十嵐明要(A)S)杉浦良三(Vib)秋吉敏子(P)渡辺貞夫(A)S)等の面々であった。こうして伊勢佐木町「モカンボ」から、その後の日本のモダンジャズ界を背負つて立つ超一流のミュージシャン達が輩出し、キャンプから来る進駐軍のロミュージシャンとの共演も実現したという。

横濱には、当時「モカンボ」以外にジャズクラブが幾つかあった。「ハーレム」「ゴールドドラゴン」「ゼブラ」「クリフサイド」「チャイニーズクラブ」「シーサイド」「オリンピック」等である。信州出で不良少年上がりの孤高の森村慎次郎(A)S)が、「ジロウ&トッポ5」を率いて活躍していた、本牧「Tophon(霧笛)」、伊勢佐木町「葵苑」や石川町「ベイサイド」も、元を辿ればきつとこれ等のジャズクラブのどれかと重なるはずである。お洒落でファッショナブルな街というよりも、進駐軍や非行少年の跋扈する荒くれた時代の横濱にこそ、熱いジャズが似合ったのかもしれない。

了

参考資料

「そして風が走りぬけて行った」植田紗加栄著(講談社)座談会「横濱はダンスのメッカ(1〜3)」有隣第391号座談会「ジャズの街・横濱(1〜3)」有隣第443号